



阿久根 賢一



岡理事長



認知症を有していても、認めてあげることが大事。 肯定されるのは、気力の源 (阿久根)

岡理事長 お世話になっているホームでは、アクティビティで計算の練習なんかもするそうですね。母はそこで自分が一番だったとか、お習字を褒められたとか小学生みたいに喜んでます。

阿久根 やはり、認めてあげることが大事ですね。人間は否定されると、元気を失っていきます。認められたり褒められたり、肯定されるのは気力の源でもあるのでしょうか。

岡理事長 阿久根理事長が書かれた本の中にも、否定しないことが肝要であると書かれていますね (第四章「新メソッドが有効なワケ」)。

阿久根 はい。これは本に書いたエピソードですが、豊泉家にはお食事を手づかみでされる方がご入居されています (第四章「新メソッドが有効なワケ」)。私たちケアする側は箸やスプーンを使って食べることが人間らしさだ、人間としての尊厳を大事にしないといけない。そう思って、手づかみされる度に「箸を持ちましょうね。」と直していたのです。ですがそういったケアをしていると、どんどん元気がなくなっていき、食欲もなくなり、それ以外の介護にも拒否反応が出るようになったんです。

岡理事長 そうなんですか。原因はなんだったのですか。

阿久根 私たちも考えていました。それで、原点に置くべきは否定しないことじゃないかと思って、手づかみを肯定したんです。そうしたらすごくご飯を食べてくださるようになり、笑顔も明るくなって、食事量と食べるスピードもとてもアップしたんです。私たちが当たり前だと思っている生活様式に、ある程度は導いて差し上げないといけない面はありますが、それが一線を超えると、否定になるんだと気付かされました。否定されてばかりの人生を過ごしていると、段々と活気がなくなっていくんですよ。それらが、我々がたどり着いた新しい認知症ケアの出発点にあるものなんです。

岡理事長 なるほど。それは素晴らしいですね。

阿久根 これも本に書いたエピソードですが、入居者の中にロビーにあるソファで寝る方がいます (第三章「事例で見る『ラテラルケア (現実肯定支援)』」)。ベッドに誘導しても、またご自分の部屋から出て、ソファで寝る。それを繰り返していると、どんどん睡眠が出来なくなっていったんです。よくよく調べてみると、その方は元看護師さんで、夜勤もされていました。現役時代の夜勤時は、よくソファで寝ていたようです。ソファで寝ることを肯定すると、よく眠られるようになり、逆にベッドで寝る時間も増えたんです。最近では我々フェローの申し送りの時に、一緒に立っているんですよ。

岡理事長 仕事をしている気分なんですね。

阿久根 そうなんです。その方の中では、後輩たちを見ている気分になっているんでしょうね。そうやって否定せずにいると、すごく元気に、穏やかになられました。このケアのやり方を理解しない人を見ると、なんというケアをしているんだと思われるかもしれません。ソファで寝かせる、手づかみで食べさせる。なんてことをしているんだ。とお叱りを受けるかもしれませんが、我々の評価基準になるのは、入居者様の笑顔です。入居者様が笑顔になれるのであれば、それもアリかなと思っています。

岡理事長 阿久根理事長のケアの方法は、病院での患者様の接し方に通じるものや参考に出来る部分がありますね。

